

村上勝彦教授退任記念号の発刊に寄せて

村上教授という呼称の方がふさわしいことを承知の上で、あえて村上学長という呼び方をさせていただきます。村上学長は1974年に着任されて以降39年にわたって本学の研究・教育・行政に携われてこられました。在職年数だけに限定すれば村上学長よりも長く本学に在籍された方は数多くいらっしゃいますが、本学への関わり方という点では村上学長に勝る方はいらっしゃらないと思われます。まさにミスター東経大といってもよい存在でありました。

村上学長は、東京都に生まれ、1965年に東京大学経済学部をご卒業され、同大学大学院修士課程、博士課程で学ばれました。1974年4月に本学に専任講師としてご着任され、一貫して日本経済史の教育・研究に従事され、多くの優秀な人材を育成するとともに広く学会等でもご活躍をされてきました。また、東京大学大学院経済学研究科をはじめとして、東京女子大学、津田塾大学などで非常勤講師を務められたほか、アジア経済研究所研究委員、国立民族学博物館共同研究員などを歴任されました。

1980年代の村上学長は、本学の国際交流の基礎を築かれたといっても過言ではありません。まず、1984年9月から1年間、初代の交換教員として北京の対外経済貿易大学で教えられ、1985年8月から引き続き2年間、国外長期研究員として中国に研究滞在され、北京大学や復旦大学の研究員を務められました。

1990年代以降は、教育・研究の傍ら、学内行政にも積極的に関与されました。まず、総合企画委員長としてコミュニケーション学部創設を推進されたあと、1996年から2年間、経済学部長を務められ、2000年には学長職に就任され3期8年間にわたり、本学の発展に貢献されてきました。さらに、2008年3月に学長職を退任後、4月より国内研究員として研究活動に没頭される予定でしたが、2ヶ月で中断して、2008年6月から3年間は、学校法人東京経済大学の理事長を務められました。その間、理事長職と教員職の兼任が好ましくないと判断され、2008年9月から理事長職を退任されるまでの期間、教員職を休職されました。2011年6月に教員職に復帰され、国内研究員の残りの任期を全うされ、教員の任期の最後の年となった2012年度の1年間教育と研究に集中され、長年の共同研究の成果を『中国雲南の開発と環境』という本にまとめられました。そして、2013年3月に39年にわたる東経大での教職を終了されました。本学はこのような功績をたたえ、2013年5月に名誉教授の称号を贈らせていただきました。

村上学長のご専門は、日本経済史、特に日本産業革命期における日本と東アジアの間の貿易・資本輸出入に関する研究であります。この研究を通じて、本学の創立者の大倉喜八郎の経済活動をよくご存じであったと伺っておりますが、8年間の学長時代には、東京経済大学

村上勝彦教授退任記念号の発刊に寄せて

の建学の精神をより明確にすることに尽力され、「進一層」や「責任と信用」というフレーズはすっかり教職員の中に定着しました。

さて、退任の前年に、私が学部長として村上学長に最終講義のお願いに伺ったところ、しばらく教育から遠ざかっていてゼミ生もいないことを理由に、最終講義をご辞退されました。しかし、最終講義もなしに村上学長がご退任になると、OBはじめ多くの人からおしかりを受けることは必定でありました。さらに、私自身が村上学長の周辺におりながら、創立者の大倉喜八郎の話をきいたことがなかったこともあり、ぜひ村上学長の話をきいてみたいと思っておりました。そこで、最終講義という形ではなく退任記念講演会を、安川副学長や羅経済学部教務主任と企画しました。3月8日に実施された講演会には、多くのOBやゼミ生、教職員が参加され、村上学長も講演に熱が入り、大幅に時間を超過して生き生きとお話をされておりました。

本学を退任後も、史料委員会の顧問として、引き続き週に何回か学校にいらしております。さらに、2013年6月には株式会社ニッピの社外取締役にも選任され、お忙しい毎日を過ごされています。

どうか体調管理には留意され、いつまでもお元気でご活躍されることを願っております。

2013年9月

経済学部長 浜野忠司